

第3回滋賀県立高等学校在り方検討委員会の結果概要について

1 会議の日時等

開催日時 令和2年8月31日(月)9時00分～11時10分(大津合庁7A会議室)(Web会議)

出席委員 原 清治 大野裕己 炭谷将史 坂口明德 高野裕子 樋口康之 稲葉芳子
権並裕子 中作佳正 大島節子 上原重治 今宿綾子 中山郁英 石野沙恵

◇滋賀県立高等学校再編計画の実施状況について意見交換

◇これからの県立高等学校の在り方について意見交換

◇部会の設置および部会の属する委員の指名

・設置する部会 : 企画作業部会

・部会に属する委員: 原委員長(部会長) 大野委員 炭谷委員 高野委員 中山委員

2 委員からの主な意見

■人口減少地域の高校の魅力化について

①	日野町では、幼稚園・保育園・こども園・小学校・中学校・高等学校で連携した教育ができるよう、教員の合同研究会を実施している。また、大学進学等で県外に出た後も、地元に戻ってきたいと思えるような町の魅力があることが大切。町の総合計画を策定する際の懇話会に、高校生にも入ってもらい意見が反映できるようにしている。
②	地域におけるかけがえのない素材を教材化し、子供の多面的な力を高めるために活用するという点については開拓の余地があるのではないか。地域の素材を活用し、課題を解決することで、地元貢献できることもあるし、世界の様々な課題を解決したいということにつながることもある。そういう地域であれば、外側から見ても、ここに行けば、個別の学びでもよくしてもらえるかもしれないという期待値が高まる。
③	島根県の魅力化コーディネーターが参考になる。学校と地域、素材と学びとをつなぐことのできる人を配置することが大事。
④	部活動は特色になるが、全ての学校に全ての部活動があるわけではない。学校ごとに役割分担するという方法もある。
⑤	文武両道といった、部活動が強く学力もある、といった学校を特徴的につくっていく必要がある。
⑥	大学からの講師や企業を活用するなどして、この学校に行けば、いろんなことが学べて資格が取れる、大学に行かなくても即就職ができるといった形を出すと志望が集まるのではないか。

■不登校、特別な支援を必要とする生徒、日本語指導が必要な生徒について

①	特別な支援が必要な生徒がたくさん高校へ進学している状況を踏まえると、通級指導が受けられる高校を、増やしていくことが必要ではないか。進学校にも通級を導入することで、不登校の未然防止にもつながるのではないか。
②	高等養護学校が併設されている高校のように、お互い学び合うことで学校も活性化される。社会のリーダーを目指す生徒にこそそのような学びの場が必要ではないか。
③	学力だけでなく、心を育てないといけない。高校へ進学した卒業生の話で、非常に学力は高いが友達との人間関係に悩んでいるとか、あるいは学校へ行けなくなってしまっているという声も聞いている。そういった高校での不登校なり、特別支援教育というのはもっと充実させていくべきではないか。

④	通級指導や特別な支援のための人材を派遣する仕組みとして、教員だけでなく、地域の中でコーディネーターを発掘するなどの取組が必要ではないか。
⑤	大津清陵高校馬場分校には、毎年 20～30 人程度、日本語指導が必要な生徒が在籍している。「日本語」という科目を設置し、外部講師と教員のチームティーチングで指導を行っている。そういったことが定時制の役割にもなっている。
⑥	多様なタイプの生徒を、全日制／定時制／通信制で受け入れることも県立高校の役割ではないか。

■ ICTを活用した教育について

①	子どもの学びの自律化と個別最適化を進めて行くべき。そうすると、発達障害の子ども自己実現できるのではないか。
②	ICT を活用した授業をするためには、ハード面を整えるということとともに、ソフト面である教職員の授業も変わっていく必要がある。授業の在り方を研究していく必要があるのではないか。
③	ICT の活用方法を教えていく必要がある。OECD の調査でも、ICT の活用が日常的に授業の中で行われていたかということについて、他国と差がある。また、私立高校の生徒が、タブレット端末で宿題をしていたのを見かけた。自治体間や公立と私立の格差をしっかりと整えていく必要があるのでは。
④	今回の Web 会議でもそうだが、ICT の良いところは、普段の授業と違って、生徒全員の顔や、生徒同士が互いの表情を見ることができること。そういうところを教師がうまく活用すれば良い授業になるのではないか。
⑤	ずっとオンラインとか、ずっと対面ではなくて、ブレンドさせていくという発想が必要ではないか。
⑥	ICT の活用が進むと、個別最適化という話もあったが、教師の役割が変わっていくのではないか。学びを導くようなメンターとか、あとはキュレーターという、いろいろな素材を掛け合わせて 1 番いいものを作るというような、そういった役割が増えてくるということは認識しておくべきではないか。
⑦	学校の中での ICT 活用と遠隔授業とは切り離して考えるべき。小中学校で遠隔授業をするのは非常に難しいと感じる。人間形成もなかなか進まないという不安もある。高校ではある程度遠隔授業ができると思うが、それでも、人間形成も大事であり、遠隔授業と対面式授業の組み合わせは、その割合を考えていかなければいけない。
⑧	ICT の利便性と、人と人とのつながりの中で大事にしていかなければならないことを、両方意識し、議論していく必要がある。ICT 化した高校をつくれといったことも有りうるのではないか。

■ 県立と私立の役割について

①	不登校や支援を要する生徒について、入試制度が工夫できないか。どうしても高等学校に行きたいという思いについて、私立が受け入れている部分があるのではないか。
②	公立高校が魅力化して、人口減少地域で他府県からも生徒に来てもらおうとすると、公立高校がだんだん私立のような特色出しをしていくことになるのではないか。これからの公立高校の在り方としてそうしたことも有りうるかもしれない。
③	中学生が高校への進学を考えると、県内では、県立高校を先に考えて、私立をすべり止めにしてしていることが多い。
④	東京、大阪などの都市部の私立は勉強に特化したり、部活に特化したりしているが、県内私立はいろんな生徒を集めていて、非常に幅が広い。従って、私学は幅広く受け入れ、公立は特色化という方法もある。ただし、インクルーシブ教育や不登校の生徒を私学で幅広く受け入れるということなら、相当な県の金銭的な支援が必要ではないか。

⑤	どのような特色があるにしても、一人ひとりの子供を丁寧に見ていくことが必要。個別に寄り添って、見ていただけるといことは、私立公立問わず大切なことではないか。
⑥	湖北、湖西、甲賀は県立高校がカバーしている。また、工業など産業系の高校は県立のみ。人口減少があっても周辺部や産業系の学びは県立が担わないといけない。一方、都市部の県立高校普通科は、魅力をどのようにつけるか、私学との関係を踏まえて整理する必要がある。
⑦	湖西からは、京都の私学や比叡山へ行く生徒が多い。県立高校も私学と同じような教育をしてほしいといった思いがある。私学は割といろんな教育を整ってやっているイメージがあるが、公立高校はそこが少し欠ける部分があるように思う。
⑧	各地に拠点となるような学校が必要ではないか。
⑨	滋賀県は公立と私立の垣根が低いように感じる。公私で一つのテーマでコンソーシアムをつくり交流できる可能性もある。切磋琢磨のレベルアップのためには恵まれた状況ではないか。

■産業教育について

①	産業教育で一番大事なのは、就職する人が多いので、社会的な責任を負う成人を育成すること。
②	産業教育では、様々なことに取組み、トライアンドエラーを繰り返すことが可能。やってみると簡単でないことがわかる。偏差値だと上げることだけが目標になるが、産業教育では、自分の能力を開発していくということが一つの目標になるのではないか。
③	民間人であっても、基準を満たした人であれば、生徒を教えることに参加できるという仕組みも必要なのではないか。
④	瀬田工業高校では、商業高校と農業高校と連携した取組として、工業高校は焼き芋器をつくり、商業高校は売れるような工夫をし、農業高校は芋を栽培するということで、一つになって社会に貢献させている。そうすることで、自分たちが本当に役に立つ人間だということを実感し、自己肯定力を育むことができる。
⑤	産業教育では、即戦力となる稼げる人たちの育成が必要。そのために、色々な経験や、実践的、専門的なことを教えてほしい。
⑥	大学から講師を呼ぶとか、企業から話を聞く、また、いろんなトライアルをやっていくとか、そういったことを実践的にしていくことが必要ではないか。
⑦	観光科というのがあると良いのではないか。地元の高校で、そういったことを学ぶと、そのまま将来地元で就職してということにつながる。地元で貢献できるのではないか。
⑧	手に職をつけたいという生徒は一定数いる。産業教育で即戦力として働ける高校と、知的トレーニングをしたい人が進学する高校とが並列になり、2つの選択肢が存在している必要がある。
⑨	山梨県の工業高校の生徒は資格をたくさん取得している子が多い。県内の工業高校、商業高校、農業高校も資格をたくさん取れるような仕組みを整えていくと、目指そうという生徒も増えてくるのではないか。
⑩	工業高校に進学した生徒でも、ものづくりが好きでない子がいる。また、普通科に進学してもものづくりが好きで就職する子もいる。高校在学中にもっと進路転換ができる柔軟な体制をとっていった方が良いのではないか。
⑪	大学入試の統一試験ではなく、高卒の統一試験をやっていただく方が良いのではないか。これは国際バカロレアの考え方と同じ。

■基本方針の骨子イメージについて

①	将来の社会の姿のところ、必ず起こることと、希望的なものが混ざっている。どちらを上にするかはわからないが、整理した方が良い。
②	高等学校の役割のところ、「課題を見つけて解決する」とあるが解決するのは難しいのでは。解決するというよりは、「考え続ける」とか、「試行錯誤し続ける」というマインドの方が大切なのではないか。
③	取組の方向性の例について、テーマごとに専門家チームを作るとか、テーマに合わせた外部専門家チームをつくり、各校の相談に乗るとか、横串でノウハウを共有する仕組みをつくるというようなことが考えられるのではないか。
④	「障害のある者とない者」という表現があるが、広く言うと多様性ではないか。「多様な子供達がお互いに、」というような表現の方が良いのではないか。
⑤	「滋賀の」とあるが、近江や滋賀ならではの内容が入っていない。近江商人の生き方というのが一つの縦糸にできるのではないか。
⑥	数値目標を入れる必要があるのではないか。
⑦	資料3-2には「与えられた課題」とあり、資料5-1には「課題を見つけ」とある。統一した方が良い。
⑧	「近江商人」とか「三方よし」の精神みたいなものを盛り込むと滋賀らしくなる。琵琶湖を含めた環境のことについても滋賀にしかないものであり、何か書き込みが必要ではないか。
⑨	国の普通科の再編のスタートが同じ令和4年度なら、滋賀県では具体的にどうするのかを記載すべきではないか。
⑩	子供たちが合わせるのではなく、子供たちに提供できるシステム、というイメージで表現する方が良いのではないか。
⑪	「課題を見つけて解決する」を「課題を見つけて考え続ける」という話があったが、「考え続けて行動する」まで入れてほしい。
⑫	魅力化の視点のところ、「小・中・高・大・社会の連続性の中で捉え」とういのは非常に大事だと思うので、小中の連続性で言えば市町との連携、大学であれば国などとの連携、社会であれば企業との連携を、高校が目指す姿の中に入れていくべきではないか。
⑬	新しい時代というのが固有名詞化されているように思う。「未来を築く」や「時代を先取り」というようなニュアンスがあれば良い。
⑭	将来のことを高校生活の中でじっくりと考えていきたいという生徒も多い。高校への希望や期待の生徒の立場から、「将来のことをじっくり考えたい」も入れてほしい。
⑮	地域社会の視点ということで、地域社会で活躍する人材、のところは、地域活性化のために地域に貢献できるとか、地域に役立つとか、そういったニュアンスが含まれると良い。